

令和五年度 専修大学附属高等学校入学試験問題

国 語

注意

- 一、試験時間は五十分です。
- 二、問題は一ページから十五ページまでです。
- 三、答えはすべて解答用紙の指定の欄に記入しなさい。
- 四、答えを書きなおすときは、きれいに消してから新しい答えを書きなさい。
- 五、問題用紙も、試験終了後回収します。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、出題の都合で改行や小見出しを省いたところがある。（解答は全て句読点、記号も一字に含める。）

文明^a発祥以降、集団は大きくなり、集団内の情報は複雑かつ多様になりました。耳にする情報がたがいに矛盾する状況になったのです。迷いが生じる不定感^①の時代のはじまりです。何を信じたらよいのかわからないという状況が、たびたび発生するようになりました。

大きくなった集団のメンバーは、困惑のなかで、情報をへらす方法を考えました。人への信頼を使って情報を整理したのです。地位の高い人々、信頼できる人々がもたらす情報を、より確実な情報として優先し、その他の人々は情報を発信しない掟^{おきて}にしたのです。

村のような中規模集団では、村の長老やシャーマンに従ったのでしよう。もつと大規模な集団では、王や皇帝、司祭や僧、象徴的な神仏が情報の源として、集団を束ねる力をもつていったのです。

法律や経済のような、非常に現代的な制度も、その派生物と見ることさえできます。法律の起源は、神仏の託宣を記した経典にあるのでしよう。経済の根本をなす貨幣は、「象徴的な人」であるともみなすことも不可能ではありません。現に多くの国の紙幣に人物像が印刷されています。人を信頼するように貨幣価値を信頼しなさい、ものごとの軽重を貨幣価値ではかかっていいのですよ、と語りかけているようです。

ところが、現代の情報社会では、その状況が崩れてきました。情報をへらす方法が追いつかなくなったのです。自由主義がすすみ、具体的な権威も、象徴的な権威も力を失ってきました。反面、インターネットなどの新しいメディアを中心に、流通する情報はますます増大しています。不定感がきわまった時代へと突入したのです。



現代の私たちの基本的な心の働きは、狩猟採集時代そのままです。耳にした情報は信じるようになってきてしまっています。Ⅰ、人々のうわさを信じやすい心は、狩猟採集時代の名残りと言えます。不定感を解消しようとして超常信奉をするのも、いたしかたないという主張もあながち否定できません。^②

ところが、進化論の視点から、現代の重大な問題が見えるのです。

協力集団を形成するうえで、集団の知識をメンバーの皆が信じる必要があります。「信じる者は救われる」です。^③それを疑うことは、集団の結束を弱めるので、疑う心は進化しませんでした。信じる者たちの集まりは、たとえば集団の共有知識が間違っていたとしても、訂正されないので、

また、信じる者たちの集まりでは、集団を束ねる権力が情報ソウサ^cによって成立します。「いけないことは、あまり考えないほうがよい」というフウチョウ^dが支配します。Ⅱ、集団内が偏った知識で凝り固まったとしても、集団が多数あれば、問題は小さいのです。それぞれの集団が固有の凝り固まり方をしていれば、考え方の多様性は人類全体では維持されるのです。

^④つまり、生物進化と同様の原理が、考え方のレベルで発生します。生物はたがいに繁栄をもとめて競争するなかで、より環境に適応した遺伝情報が残るといふ歴史をたどりました。それと同様、よりふさわしい考え方をもった集団が、集団間競争で生き残っていく歴史をたどるのです。呪術によるお祓い^{はち}の知識をもった集団より、衛生観念で菌を消毒する知識をもった集団が生き残ったわけです。

しかし現代では、集団間競争が少なくなってきました。人類全体がひとつの制度のもとで連携するグローバル社会へと近づいています。大集団のなかで、人類全体がともに生きるという状態が見えてきています。そのなかで、集団を束ねる力を旧来のままにしておく、集団全体が独善におちいり、環境の変化に対応できなくなるおそれがあります。

つまり、将来の変化に備え、多様な考え方や、たがいに矛盾する知識を、集団の中で維持しておかねばなりません。

最近、たくさんの遺伝情報を保護しようという生物多様性が叫ばれていますが、それと同様に、知識多様性が必要なのです。

⑤ 知識が多様な社会に生きる個人は、どのような状態になるのでしょうか。たがいに矛盾する情報にさらされるのは、ごくふつうのことであり、不定感に耐える必要があります。矛盾する情報のなかで、じぶんのスタンスを決めねばなりません。

そして、いったん決めたスタンスもその後の情報にもとづいて変更するという、柔軟性の発揮もとめられます。信じていることも、ときには疑ってチェックしなくてはならないのです。信じていることを疑うのは、心理的なハードルがかなり高い作業です。

こうした態度は、懐疑心とか、批判的思考（クリティカル・シンキング）とかと呼ばれます。これらは、進化の過程で人間に備わっていないので、教育で教え込まなくてはなりません。読み書きそろばんに加え、現代の情報社会でとくに重要な技能となっています。

「疑いを捨てて、じぶんを信じろ」というスローガンは、個人的な安心にはよいのですが、懐疑心の価値を低めてしまいます。それに、そんな人々ばかりになれば、いちれんたくま集団は一蓮托生になり、ひとたび問題が発生すれば破滅的です。

⑦ ですので、現代社会に貢献するスローガンは、「まずは疑ってかかれ、信じずにしつかり吟味せよ」です。現代人の大きな悩みの根源が、これらのスローガンの矛盾に、明瞭に表現されています。

石川幹人『人は感情によって進化した』（ディスカヴァー携書）

問一 傍線部 a ～ e の漢字は平仮名に、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 傍線部①「不定感の時代」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 集めた情報が整理できなくなり、不快に感じる時代。
- イ 情報同士が食い違い、信じるものを決められない時代。
- ウ 情報の発信が制限され、国民に不満がたまる時代。
- エ 流れる情報が多くなり、情報自体の価値が下がる時代。
- オ 必要な情報が収集できず、問題が解決できない時代。

問三 ※部分の内容の説明として適当なものを次から全て選び、記号で答えなさい。

- ア 現代の情報社会においては集団を束ねるものの権威が失墜した。
- イ 情報の発信源が具体的な権威から象徴的な権威へと全て移行した。
- ウ 法律も経済も結局のところ人の手によって運用されるものである。
- エ 紙幣に印刷されている人物はかつてのシャーマンや長老である。
- オ 流通する情報が増えて情報をへらす方法が間に合わなくなった。

問四 空欄 I・II に当てはまる語を次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ また ウ しかし エ なぜなら オ あるいは

問五 傍線部②「あながち」の意味として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 即座に イ あいにく ウ 少しも エ 容易に オ 必ずしも

問六 傍線部③「それ」が指すものを本文から五字で探し、抜き出して答えなさい。

問七 傍線部④「生物進化と同様の原理が、考え方のレベルで発生します」の説明として最も適当なものを次から選

び、記号で答えなさい。

ア 科学的な考えを持つ集団が生き残る。

イ わかりやすい考えを持つ集団が生き残る。

ウ 賛同者が多い考えを持つ集団が生き残る。

エ 環境に合った考えを持つ集団が生き残る。

オ 斬新な考えを持つ集団が生き残る。

問八 傍線部⑤「知識が多様な社会に生きる個人」について、筆者の考えを以下のようにまとめた。空欄 A・

B に当てはまる語句を本文からそれぞれ指定された字数で探し、抜き出して答えなさい。

情報社会では、虚偽の情報に惑わされたり、不要な情報に悩まされたりするため、人々は A (七字) ことが求められる。そしてじぶんのスタンスを決めた後も、見直し修正するという B (六字) が必要である。

問九 傍線部⑥「疑う」の活用形として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 未然形 イ 連用形 ウ 終止形 エ 連体形 オ 仮定形 カ 命令形

問十 傍線部⑦「まずは疑ってかかれ、信じずにしっかり吟味せよ」とあるが、そうすることによって、社会はどのようなと筆者は考えているか。二十字以上二十五字以内で答えなさい。

二次の文章は、「民藝運動の父」と称される柳宗悦の民藝論を踏まえ、「伝統と現代」について論じたものである。本文の直前では、職人によって民衆の生活のために安く大量につくられたものを民衆的工芸と呼ぶ、と述べている。この内容に続く以下の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（解答は全て句読点、記号も一字に含める。）

無数の民衆のために、大量につくらねばならないから、どうしても同じような仕事、同じような模様の果てしない繰り返しとなる。高い品をつくるでもなし、時間のヨユウaもないから細部の装飾などにこだわってはいられない。しかし、このⅠaな仕事の繰り返しがいづのまにか腕に磨きをかけてしまう。そしてその作品に奔放な味わい、淀みなき冴えた心の表現、いきいきとした自然の勢いを与える。いきおい、民芸*1においては形にしても模様にしても単純なものになる。複雑な形は、物をこわれやすくするであろうし、混雑した模様や派手な色は用を殺すこと①になるだろう。柳*2によればⅡaなものとはⅢaなものではない。それは「凡てすべの無駄を省いた、なくてはならないもの」の結晶である。本質的なもの煮詰められた姿である。それは複雑を摂取した単純である。禅語を借りれば『一切を含む無』である。単純は単一ではない。単純よりもつと多くを包括するものはない。だから単純よりもつと濃く美を表示することは出来ない」（『工芸文化』昭和一六年）。焼物や織物の「無地もの」がその代表的な例である。よき無地には一切の色が包含される。民芸の美はⅣaの美である。

もちろん、職人たちはただ彼等かれらの熟練した腕だけで品物をつくるのではない。彼等にも、ものをつくるに際しての拠りどころがある。伝統がそれである。伝統は、彼等と同じようにひたすらものをつくり続けた祖先たちの知恵と経験の結晶である。

（中略）

伝統を批判し、個性的な美の表現を目指す美術家や、個人的工芸作家に対し柳が批判的であるのも、個性の表現がそのまま普遍性につながるのが困難である、という認識があるからである。これに対して、職人たちは「個」（私）を忘れ、無心にこの伝統すなわち型に身を寄せるが故に、普遍的な美、型の美を手にするということになる。

③ 職人たちは何千何万と、同じ品を早く、大量につくらねばならない。ごく普通の生活用品であるから多少ゆがもうが、傷つこうが、不揃いになろうが気にしない。しかし、このような仕事を繰り返し返しているうちに技術は熟達し、伝統的な型を体得し、自在に品物をつくれるようになる。彼等はものをつくるという意識さえ越え、無心にものをつくるまでに至る。つくる者をつくられる物の区別すらなく私なき仕事、いわば仕事^④が仕事をする境地に達する。たとえば、茶道で名器の誉れ高い井戸茶碗や刷毛目茶碗にしても、もとはといえば朝鮮の無学で貧しい陶工たちが、民衆の生活のためにつくった碗にすぎない。かの陶工たちはただつくった。そこには美醜の対立もなければ善悪の区別もない。自他の区別もない。仏教でいう「無我」の境地、「不二」の立場がそこにある。ただつくるということ、無心につくるということ、それは美術家や個人的工芸作家ならぬ職人であればこそできることである。できた品物には何の^{*3}てらいもなければ媚^こびもない。それはいつてみれば「無事」の作、「平常」の作である。民衆的工芸の美は無事の美、平常の美である。健康の美ともいえる。人は健康であるとき、健康のことを意識しない。病気になるって初めて健康の価値を意識する。美の世界においても同じことがいえる。意識されない美しさの世界、^⑤美しさがあたりまえの世界が民芸の世界である。

⑥ 伝統と自然は密接な関連をもつ。とくに素朴さは大いにその土地の自然と関係する。たとえば芭蕉布が沖縄でできるのは、沖縄が糸芭蕉の生育に適しているのと同時に、それを織るのに適当な温湿度をもっているからである。プラスチックや人造^dセインなどの化学的素材が土地に関係なく使われるようになったのは、科学技術が発達し、交通が発達した近代になってからのことであり、それ以前においては、素材はすべて自然から手に入れたままの素材であった。とく

に交通のベン^eが悪かった時代には品物は地方的であった。その土地の自然によって材料が決まり、材料で品物が決まる。しかも自然の材には、人間がつくりだした材料に比して神秘的な美しきがある。人造藍は色の深さ、美しさにおいて遠く天然の藍に及ばない。

この天然の素材を加工するのは、人間の手と道具だけである。人間の手は自然の造化であり、心につながる。手には機械とちがって順応性と創造性がある。手仕事には自然の理法が力を貸してくれる。「手結い」と呼ばれる手法でつくられる沖繩の緋^{なす}をみてみよう。

⑦ ^{*4ぬきいと}手結いというのは、緯糸を予定の布幅より余分に見積もってとったうえで、いくつかの単位を決めて糸でくり、これを浸し染めにして緋柄をつくる手法のことである。機^{はた}の上で織る段階で、余分にとった分だけ右や左に緯糸をずらして柄をつくることになる。ずらせる幅は、はじめで決められてそれ以上ずらせようがないから、その範囲でのみ柄がつくられるし、その柄も幾^{*5きかがく}可学的な柄になる。したがって、緋柄の配置も織手の自由にはならない。ところが、柄の配置や形が、物理的な法則に規定されることが逆に、この織物にわざとらしくない落ちついた雰囲気を与えるのである。はじめに種糸^{*6}をつくって、作者の勝手 **V** ままな自由な柄を自由に配置できる「絵図緋」にくらべれば、自由な手法ともいえるが、**VI** を返せばそれだけ自然の理法がたらぬかれているということである。同じことは緋のずれやぼかしについてもいえる。糸をくくって防染をするものの、人間の手わざであるから若干の狂いが生じるし、いくら強く括^く括^くしてもその両端には染料がにじんでしまう。それが柄のずれやぼかしを生ずる。これとても人間の側からすれば失敗ということになるが、自然の法からすれば理にかなっている。そして、この緋のずれやぼかしこそ、緋^⑧の美しさとされているのである。

* 1 民芸…民衆的工芸のこと。「民藝」と同じ。

* 2 柳…柳宗悦のこと。

* 3 てらい…ひけらかすこと。

* 4 緯糸…織物の横糸のこと。

* 5 幾可学的…形などが法則にのっとり、ある一定のパターンを持っている様子のこと。「幾何学的」と同じ。

* 6 種糸…糸を括り、緋糸を作る際に、括るときの目印になる糸のこと。「緋の設計図」となる。

問一 傍線部 a、e の漢字は平仮名に、カタカナは漢字に改めなさい。

問二 空欄 Ⅰ、Ⅳ に当てはまる語の組み合わせとして最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア	Ⅰ…単純	Ⅱ…単純	Ⅲ…単純	Ⅳ…単純
イ	Ⅰ…単純	Ⅱ…単純	Ⅲ…単純	Ⅳ…単純
ウ	Ⅰ…単純	Ⅱ…単純	Ⅲ…単純	Ⅳ…単純
エ	Ⅰ…単純	Ⅱ…単純	Ⅲ…単純	Ⅳ…単純
オ	Ⅰ…単純	Ⅱ…単純	Ⅲ…単純	Ⅳ…単純

問三 傍線部①「用を殺す」の説明として最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 用いられた材料の質感や外見を台無しにしてしまうこと。

イ 自然の美を前面に打ち出した作品として通用しなくなる事。

ウ 趣向を凝らし愛用品としての価値を高めること。

エ 日常的に使うという用途を全うできなくすること。

オ 装飾にこだわりすぎ高価な日用品となってしまうこと。

問四 傍線部②「個性の表現がそのまま普遍性につながるのが困難である」とあるが、その理由を以下のようにまとめた。空欄に当てはまる語句を本文から十字で探し、抜き出して答えなさい。

美術家や個人的な工芸作家は、作品を が難しいから。

問五 傍線部③「職人たちは何千何万と、同じ品を早く、大量につくらねばならない」とあるが、職人たちと機械とを分けるものとは何か。本文から七字で探し、抜き出して答えなさい。

問六 傍線部④「仕事の仕事をする境地に達する」上で必要な条件とは何か。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 技術の熟達
- イ 個性的な表現
- ウ 無心につくること
- エ 「不二」の立場
- オ 科学技術の発達

問七 傍線部⑤「美しさがあたりまえ」と筆者は述べているが、「あたりまえ」とはどういうことか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 作り手も使い手も「美しさ」を意識しているということ。
- イ 使い手だけが「美しさ」を意識しているということ。
- ウ 使い手には「美しさ」が意識されないということ。
- エ 作り手だけが「美しさ」を意識しているということ。
- オ 作り手も使い手も「美しさ」を意識していないということ。

問八 傍線部⑥「伝統と自然は密接な関連をもつ」とあるが、その理由を以下のようにまとめた。空欄 A・
B に当てはまる語句を本文からそれぞれ指定された字数で探し、抜き出して答えなさい。

その土地の自然が生み出した A (五字) から、その土地の B (七字) だけで生み出された工芸品が伝
統となるから。

問九 傍線部⑦「手結い」の工程を踏まえ、生徒A～Eが話し合っている。本文の内容と合致しない発言をしている生徒の組み合わせを次から一つ選び、記号で答えなさい。

生徒A 手結いは緯糸をあらかじめ長めに取り、いくつかの単位でそれらを糸で束ね、染色する手法だよね。
生徒B その通り。染色後には機を織る段階で緯糸をすらすらすることによって、幾何学的な模様が生まれるんだ。
生徒C 柄はとても落ち着いた雰囲気を感じられるね。その土地の伝統的な柄や形を織り込んでいるからだね。
生徒D でも絵図緋と比べると、柄や配置が思い通りにならない不自由さはあるよね。
生徒E 手仕事だから、柄のずれやぼかしを想定して染色しなければならないという難しさもあるよね。でも、それを除けば、決して不自由な手法ではないと思うよ。

- ア 生徒Aと生徒B
- イ 生徒Aと生徒E
- ウ 生徒Bと生徒D
- エ 生徒Cと生徒D
- オ 生徒Cと生徒E

問十 空欄 V・VI に当てはまる語をそれぞれ漢字一字で答えなさい。

問十一 傍線部⑧「絢の美しさとされている」とあるが、「絢の美しさ」は何によってもたらされるか。最も適当なものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 絢のずれやぼかしが、その土地の景色を写し出していること。
- イ 絢における柄の配置や形が、規則正しく配置されていること。
- ウ 絢のずれやぼかしが、職人の個性をあらわしていること。
- エ 絢における柄の配置や形が、自然の力を借りて特殊な美を表現していること。
- オ 絢のずれやぼかしが、人間には生み出せない自然の摂理に則っていること。



